

第31回
西洋社会科学古典資料講習会

2011年11月9日(水)～11日(金)

一橋大学社会科学古典資料センター

②	10:45～12:15	古典研究（Ⅱ） ウィリアム・モリスから受け継ぐもの	出雲 雅志 神奈川大学経済学部 教授 板井 広明 青山学院大学 非常勤講師	18
③	13:15～14:45	保存・修復（Ⅰ） 西洋古典資料に使われる材料：製本と保存	岡本 幸治 製本家・書籍修復家	22
④	15:00～16:30	センター見学・工房実演	古典資料センター 貴重書保存修復工房	

第3日 11月11日（金）

(9:00～9:45) 附属図書館見学: 希望者のみ

①	10:00～11:30,	資料展示論 図書館展示の5W1H	澁川 雅俊 元慶應義塾大学環境 情報学部教授	27
②	12:30～14:00,	古典研究（Ⅲ） 経済学の起源：フランスのコンテクストを 中心に	米田 昇平 下関市立大学教授	30
③	14:15～15:45,	保存・修復（Ⅱ） 材料と環境	増田 勝彦 昭和女子大学大学院 生活機構研究科教授	33
	16:00～16:20	修了式		

※第3日のみ各時限の開始時間が異なりますのでご注意ください。

記述書誌を“読む”面白さ –図書館員のための書誌学入門–

武者小路 信和

(大東文化大学文学部准教授)

世界各国の主要な国立図書館・学術図書館などを中心として、古典資料のデジタル画像を web 上で公開するプロジェクトがさかんに進められています。とくに IT 企業の主導・支援によって、この動きは以前に想像されていたよりも急速に進行しています。所蔵する図書館へわざわざ出向かなくても、インターネットに接続できれば世界中のどこからでも、その古典資料にアクセスでき、本文を読むことができることは非常に大きな魅力です。

では、こうした動きが加速化していくなかで、各図書館が古典資料を所蔵することの意義、あるいは新たに古典資料を購入することの意義は、どこにあるのでしょうか？ インターネットでも本文を読むことができるのであれば、各図書館が古典資料の「現物」を収集し、整理し、サービスし、保存していく必要はなく、逆にお金の無駄だということになってしまうのでしょうか？

詳しい説明は実際に講義において行いますが、とくに古典資料の場合、その造本行程に起因して、同時に印刷・出版された「同じ本」同士の間でも本文の異同が存在する可能性があります。したがって、同じ本の複本を、単純に重複しているから無駄であると判断することはできないし、たとえその本の画像が web 上で公開されているとしても、それで充分である・他のコピーが必要ないということではないのです。

たとえば、Shakespeare の最初の全集 (London 1623) [First Folio (最初の二折り本) と呼ばれる] に関しては、C. Hinman が、自身で開発した Collator (校合機) を用いて、Folger Shakespeare Library に所蔵されている First Folio (のなかから) 約 30 点を子細に比較・照合したことで、本文の異同の解明が大いに進みました。複本は、同じ場所で現物同士での比較・照合を可能にする点でも決して無駄なものではありません。なお、A.J. West. *The Shakespeare First Folio. Vol.2: A New Worldwide Census of First Folios.* (Oxford University Press, 2003)によれば、Folger Shakespeare Library は First Folio を 82 点 (現存するものの 1/3 以上) 所蔵しており、次いで明星大学の 11 点が続きます。

本の魅力は、中身を読む「読書」の面白さだけにあるのではなく、書物の「モノ」としての側面にもあります。とくに古典資料は、一冊一冊が「個性」をもち、なかなか渋い魅力をもっています。たとえば、David Pearson はその著書 *Books as History: The Importance of Books Beyond Their Texts.* (London: British Library, 2008; rev. ed. 2011)において、書物にとって「本文」だけが重要なのではなく、「モノ」としての書物はそれぞれが歴史的に持つ個性 (たとえばブックデザイン、来歴・書き入れ、製本など) を持っており、その歴史的な個性の重要性・魅力を、豊富な図版を使って具体的に紹介しています。(読み通すのが大変であれば、図版の解説部分だけを読んでも、面白い本で

す。)この本でも紹介されていますが、「本当にコペルニクスの著作は読まれなかったのか」を調べるために、科学史の研究者が約30年かけて世界中に残っているコペルニクス『天球の回転について』(1543)の初版と第2版約600冊の現物調査(とくに書き入れの調査)を行いました[Gingerich, Owen. *An Annotated Census of Copernicus' De Revolutionibus (Nuremberg, 1543 en Basel, 1566)*. (Leiden: Brill, 2002)].この調査を行ったオーウェン・ギンガリッチの『誰も読まなかったコペルニクス: 科学革命をもたらした本をめぐる書誌学的冒険』(早川書房 2005)では、できるだけ多くの現存する資料に直接あたることによって、初めて見えてきたことが生き生きと語られています。このような現存する同一本・同一タイプの資料にできるだけ多く直接あたって調査する研究方法は、数は少なくても、増えてきています。こうした学術研究を支えるためにも、各図書館が現物の古典資料をこれからも所蔵していくことが重要です。

現在のようなインターネット/デジタル時代に古典資料を扱う図書館員(古書籍業者を含む)にとって、古典資料がもつ個性、つまり本文(テキスト)、製本、来歴(provenance)、書き入れなど、印刷・出版・造本・所有・読書・利用に関わる歴史的「個性」を見抜くちからが、特に求められているように思われます。そして歴史的「個性」を見抜くためには、書誌学の基本的な知識が不可欠です。

書誌学(bibliography)という用語は、書誌の編纂およびその活動を意味する列挙(分類)書誌学(enumerative bibliography)・体系書誌学(systematic bibliography)を指す場合と、「モノ」としての書物の研究あるいは文献伝達の研究(the science of the transmission of literary documents)を意味する分析書誌学(analytical bibliography)を指す場合とがあります。ここでは後者、つまり「原稿や植字工の植字癖の研究・分析を含む造本工程の研究を通して正しい本文を解明しようとする試み」(山下浩)としての書誌学を対象にしています。

書誌学の魅力の一つは、紙、活字、印刷面、造本など、「モノ」としての書物に残された具体的な物理的証拠に基づいて、その書物の本文、印刷・造本工程や出版にまつわる疑問を解明する「謎解き」の面白さにあります。といっても、書誌学の調査を行うためには、ある著作の同じ本あるいは版・刷・発行の違う本をできるだけ多く比較照合する必要があります。さらに著者や出版者の手紙・記録などの史料・資料を見つけ読み込んでいくことも必要です。購入を検討する場合や目録をとる場合など、図書館業務のなかで古典資料を扱う図書館員にとって、こうした「謎を解く」ためにそうそう時間や手間をかけてもいられません。そのため、書誌学の研究成果(書誌類・論文など)を上手に利用する必要があります。いわば、書誌学者を実際に謎を解く探偵とみなせば、図書館員は、実際の本と照合しながら書誌類・論文を読むことによって、推理小説を読むように謎解きのエッセンスを楽しめばよい、といえるかもしれません。(図書館員が実際の謎解きに取り組むことを否定しているわけではなく、積極的に謎解きに参加して貰いたいと思っています。)

今回は、(書誌学の研究成果を活用するために必要な)書誌学の入門的な知識と共に、書誌学の

魅力・面白さを紹介したいと思います。

- 1 古典資料をオリジナルで所蔵することの重要性
- 2 書誌学の研究成果を上手に利用する
- 3 図書館員のための書誌学の基礎（Ⅰ）：本の仕立て
- 4 図書館員のための書誌学の基礎（Ⅱ）：記述書誌の読み方
- 5 図書館員のための書誌学の基礎（Ⅲ）：印刷地の見分け方
- 6 書誌学調査のための科学機器
- 7 西洋古典資料とインターネット

といっても、講義時間の関係もあり、今回は主に「3 本の仕立て」と「4 記述書誌の読み方」を中心に上げる予定です。

「本の仕立て」（その本がどのような折り丁によって構成されているか）は、「モノ」としての書物を理解するうえでの出発点であり、「記述書誌の読み方」は、（理想本について記録した）記述書誌*と比較・照合することによって、その本が

- ①どんな本であるのか（著者、出版者、出版年など）
- ②どの版(edition)、刷(impression)、発行(issue)に属するのか（他のコピーとの関係）
- ③完全なコピーであるのか（本来あるはずの紙葉、図版などを欠いていないか）

といったことが判るので、図書館で古典資料を購入したり、利用者にサービスをする際に役に立つでしょう。

*図書館の目録が、実際に目の前にある一冊の本の書誌的事項などを記録したものであるのに対し、記述書誌(descriptive bibliography)は、理想本（ideal copy：市販された刷・発行の範囲内で、出版者が出版を意図した形の本を歴史的に検討して再構築した本）の書誌的事項などについて記録しています。

業務のなかで古典資料を同定するために記述書誌を利用する場合には、その資料に関わる記入・書誌記述を参照するだけで済むことも多いでしょう。でも機会があったら、記述書誌の序文などの解説部分にも目を通すことをお勧めします。記述書誌を“読む”ことで、その著作の成り立ちや印刷・出版の経緯、著者と出版者との（交流や諍い・いざこざを含む）関係などを知ることができだけでなく、そのような経緯や関係が「モノ」としての書物に具体化されていること、その結果「モノ」としての書物を記録した記述書誌の記入・書誌記述にも反映されていることが理解できるでしょう。

詳しい資料・参考文献リストは当日配布しますが、とりあえずの参考文献として以下のものを挙げておきます。

- ・高野彰『洋書の話』増補版（丸善 1995）
記述書誌の読み方の基本を知るうえで便利な日本語の文献。
- ・G. Thomas Tanselle. *Bibliographical Analysis: A Historical Introduction*. (Cambridge University Press, 2009) 書誌学の動向・主要な研究を歴史的に解説したもので、文献案内としての機能も併

せ持っており、書誌学の研究史および重要な研究成果を知るうえで非常に便利な本。

なお、同氏による基本文献の書誌 *Introduction to Bibliography*.および *Introduction to Scholarly Editing*.が、University of Virginia Rare Book School(RBS)のサイト <http://www.rarebookschool.org/tanselle/>から無料で入手できます。(ダウンロードして損はありません。)

- *Marks in Books*.(Cambridge, MA: Houghton Library, Harvard Univ., 1985) Harvard 大学の貴重書図書館 Houghton Library が所蔵する、さまざまな「個性」をもった本が紹介されています。皆さんの図書館にもこのようなお宝が眠っているかもしれません。
- 書物関係の用語事典として有名な Carter, John. *ABC for Book Collectors*. 8th ed. by N. Barker.が、International League of Antiquarian Booksellers(ILAB)のサイト http://www.ilab.org/eng/documentation/29-abc_for_book_collectors.html から無料で入手できます。(ダウンロードして損はありません。)

本書（第六版）の邦訳：『西洋書誌学入門』（図書出版社 1994）（ビブリオフィル叢書）

- 安形麻理『デジタル書物学事始め』（勉誠出版 2010）
最近注目をあびるようになった書誌学へのデジタル技術の応用の動向・具体例を知るうえで有用な本です。檜村雅章『貴重書デジタルアーカイブの実践技法：HUMI プロジェクトの実例に学ぶ』（慶應義塾大学出版会 2010）も参考になります。
- ウィリアム・ノエル、リヴィエル・ネッツ『解説 アルキメデス写本：羊皮紙から甦った天才数学者』（光文社 2008）も、対象は印刷本ではなく写本ですが、面白く読め、お薦めです。
- 書誌学・古典資料関連の web サイトの入り口としては、私のサイト「The Biblio Kids！」
<http://www1.parkcity.ne.jp/bibkid> に「泰西古典資料 リンク」のページがあります。

デジタル書物学：資料デジタル化と書誌学の幸せな結びつき

安形 麻理

(慶應義塾大学文学部准教授)

1. 書物のデジタル化：二つのアプローチ

「書物（紙の本）」と「デジタル化」というと、とかく紙の本はなくなってしまうのか、という悲観的な話になりがちです。しかし、書物の研究という面から見ると、デジタル化によって明るい展望が開けてくるのです。

20世紀末から各国の大学図書館や国立図書館、大規模な公共図書館などによって、所蔵資料（またはそのマイクロ資料）のデジタル化が進められてきました。当初は貴重書が主でしたが、最近では一般図書のデジタル化もさかんになってきています。近現代の一般書を対象とした大規模デジタル化としては、国立国会図書館による所蔵資料のデジタル化や、Google ブックスに代表される民間企業によるデジタル化が注目を集めています。

書物の画像や文字データがこれまでにない規模で利用可能になるという状況は、娯楽のための読書にも、仕事や研究に必要な情報の入手にも、大きな変化をもたらすでしょう。しかし、大規模デジタル化では、デジタル化の対象やデータの品質・正確性・信頼性における限界があり、往々にして研究の素材としては十分なものではありません。古い／貴重な／特殊な書物のデジタル化においては、対象の選定から撮影手法の決定、公開の形態に至る各段階において、一般書とは異なるアプローチが必要となるのです。

2. デジタル化の手法

デジタル化の手法についての国際規格や標準はありません。暫定的なガイドラインがいくつか公開されていますが、デジタル画像の品質にはばらつきが大きいのが現状です。

重要なのは、「とりあえずデジタル化」ではなく、何のために、誰のために、何をデジタル化するのか、を熟慮して計画を立てるというプロセスです。

一般的なデジタル画像の入力の方法としては、以下のような機材が挙げられます。

- ① アナログ・フィルム + フィルム・スキャニング
- ② フラットベット・スキャナ
- ③ デジタル・スキャニング・カメラ
- ④ デジタル・1ショット（または3ショット）・カメラ
- ⑤ 自動ブック・スキャナ

特に古典資料の場合は、資料をいためることなく、それでいて色や形状を正確に再現することが求められます。そのためには、資料の形状（和装本、地図、巻物、一枚もの、冊子体の洋書など）や使用用途（展示用、ウェブ公開用、研究用、保存用など）に応じた、適切な撮影機材・撮影方法を選択し、きちんとした色管理を行わなければなりません。

ん¹⁾。

3. デジタル化の意義

デジタル化によって、利用、保存、研究支援それぞれにメリットが期待できます。利用面では、アクセス性の向上、現物の代替として閲覧に供することによる結果的な資料保護、修復の際の道具としての利用、デジタル修復の実現などが挙げられます。媒体変換の一種でもあり、長期保存に課題が残されているとはいえ、データの劣化がないため半永久的な保存が期待できます。また、長い年月の間にばらばらになり、複数の場所に所蔵されている資料をヴァーチャルに復元することも可能になります。例えば、現存最古のキリスト教の聖書の写本である「シナイ写本」は四カ国に分散していますが、現存する全ページの画像と文字データがデータ上で一つの写本として再構成され、2009年7月にインターネットで公開されました²⁾。

さらに、ここで注目したいのは、コンピュータを援用した書誌学的な研究の支援です。利用に制約が多い現物と比べて、デジタル画像はアクセスや研究利用が容易で、提供側の図書館にとっても利用側の研究者にとっても便利だけでなく、新しい研究方法を産み出す可能性を秘めています。

4. 研究支援：デジタル化と分析書誌学

(古い) 書物を研究対象とする書誌学とデジタル化は対極にあるように思えるかもしれませんが、実は密接な関係にあります。前の武者小路先生の講義にある通り、分析書誌学は「モノ」としての書物に残された物理的証拠に基づき、その書物の生産にまつわる疑問を解明する「謎解き」です。謎解きには、これまでも様々な科学的調査手法が導入されてきました。デジタル画像とコンピュータは、新たな強力な味方になりうるのです。

例えば、画像の撮影方法を工夫し、画像処理を施すことにより、難読文字の解読を目指すアルキメデス・パリンプセスト・プロジェクトは、めざましい成果をあげています³⁾。パリンプセストとは、羊皮紙を再利用して作られた重ね書き写本です。このプロジェクトでは、10世紀に写されたアルキメデスの数学に関する現存唯一の著作『方法』に、13世紀の祈禱書が重ね書きされた写本を対象に、下に隠れた『方法』の解読を進めています。

プリンストン大学の書誌学者ニーダムと物理学者アグエラ・イ・アルカスの活字鑄造法に関する共同研究も、大きな反響を呼んでいます。彼らは、グーテンベルクが1456年に印刷した『トルコ教書』の画像中の小文字*i*に対し、独自のアルゴリズムによるクラスタリングを行いました。クラスタリングを行うと、似たデータは同じクラスター(グループ)にまとまります。従来、グーテンベルクは金属製の父型・母型・鋳型を用いて

¹ 樫村雅章. 貴重書デジタルアーカイブの実践技法：HUMI プロジェクトの実例に学ぶ. 慶應義塾大学出版会, 2010, 272p.

² Codex Sinaiticus. <http://www.codex-sinaiticus.net/en/>, (参照 2010-1-11).

³ リヴィエル・ネッツ；ウィリアム・ノエル. 解読！アルキメデス写本：羊皮紙から甦った天才数学者. 東京, 光文社, 2008. 442p. また, <http://www.archimedespalimpsest.org/index.html>.

同一の活字を大量に鑄造したと考えられてきました。同じ母型から作られた活字は一つのクラスターにまとまるはずですが、彼らの実験結果では数百というクラスターが得られたのです。ニーダムらは、これは従来の説と矛盾するとして、例えば砂の鑄型のような一度しか使えない母型で鑄造されたという仮説を発表し、論争を巻き起こしました。この研究は、BBCのテレビ番組が作られるなど、専門家だけでなく一般からの注目も集めています⁴⁾。

5. 研究事例：デジタル画像を用いたグーテンベルク聖書の校合

(1) 校合 (Collation) の意義

校合とは、写本や刊本（特に初期刊本の同じ版の中）の本文の異同を、比較・記述することです。印刷本であっても、手引き印刷時代の書物の間には、単語の挿入・削除・差し替えや、綴りの変更、異形活字への変更、語間の調整などの印刷上の細かな違いが存在し、印刷工程説明の手がかりを与えてくれます。グレッグが“本には、同じ本に見えても、同一ではないものがある。書誌学を習い始めた人はこの点を忘れてはならない”と指摘している通りです⁵⁾。これは、印刷中に間違いに気付いたときに、活字を差し替えて修正することがよくあり、修正前のものも後のものも区別なく使われたためです。

(2) 従来の校合の方法：校合機

最も単純な校合の方法は、肉眼で見比べることです。しかし、下の図1で試していただければわかるように、労力と時間がかかるうえに見落としが多く、長いテキストに対しては現実的な方法ではありません。そこで、20世紀後半になり、鏡を使ったヒンマン校合機や、錯視を利用したステレオスコープ型の校合機が考案されてきました。こうした校合機は書誌学研究に有効な道具であり、成果も残していますが、オリジナル資料が校合の場に必要、操作者の適性が要求される、校合の結果を保存できない、などの問題がありました。デジタル画像を用いた校合手法は、こうした問題を解決することができるのです。

(3) 画像を用いた校合

ソフトウェア上で画像を半透明にして重ねる静的な重ね合わせや、画像を画面上の同じ場所で連続して高速で切り替える動的な重ね合わせを行うことにより、単語や文字だけでなく、文字の形の違いや文字間のスペースの違いといった細かな印刷上の違いも正確に、そして速く見つけることが可能になります。

私は、この重ね合わせの手法を用いて、西洋最初の本格的な活版印刷本であるグーテンベルク聖書の校合を行っています。現存する48部のうち16部がデジタル化され、その多くのデータが何らかの形で利用可能になっています。グーテンベルク聖書は、これまでも現存本間の違いが3箇所だけ偶然発見されており、校合の必要性は認識されながらも、データや適切な校合手法がないために体系的な校合を行うことができなかったのです。

画像を用いた校合の結果、全1,282ページ中の88ページに117箇所の修正が見つか

⁴ Agüera y Arcas, Blaise. “Temporary Matrices and Elemental Punches in Gutenberg’s DK Type”. *Incunabula and Their Readers*. Jensen, Kristian, ed. London, British Library, 2003, p.1-12.

⁵ 高野彰『洋書の話』増補版。丸善, 1995, p. 177.

りました。その内容は、綴り間違い、活字の向き、語の区切りの修正や、異形活字への変更、短縮語の使用方法の変更など様々でした。校合結果を先行研究の成果とあわせて考察することで、印刷中の修正作業は突発的・偶発的なものではなく、ある程度確立した作業であったこと、修正は各ページの印刷初期に一度だけ行われたこと、羊皮紙本は常に修正後の状態を示すことから羊皮紙ページの方が後から印刷されたこと、などを明らかにすることができました⁶。

画像を活用した研究は端緒についたばかりですが、既に数々の成果も出ており、今後の発展が期待されます。

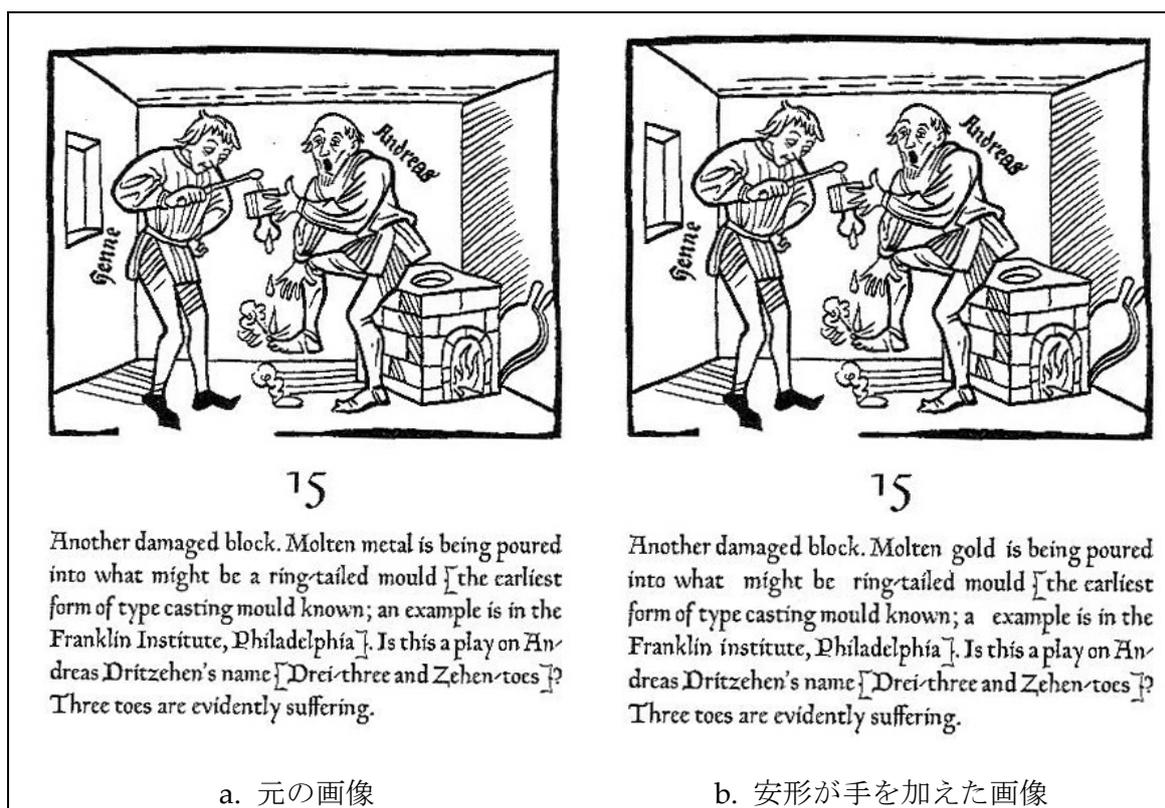


図1 肉眼での校合

画像出典：[Cary, Melbert B.]. The missing Gutenberg wood blocks. New York, Press of the Woolly Whale, 1940.

⁶ 安形麻理. デジタル書物学事始め：グーテンベルク聖書とその周辺. 勉誠出版, 2010, 211p.

『稀観書の書誌記述』による目録作成

床井 啓太郎

(一橋大学社会科学古典資料センター)

1. はじめに

この講義では、主に 19 世紀より以前に西洋で出版された古版本の目録作成について、特に国立情報学研究所の総合目録データベースへの登録作業の実際に即して、注意点などを考えていきたいと思えます。目録作成は、AACR2 (英米目録規則第 2 版) における初期刊本に関する規程 (2.12-2.18) の拡張規則である *Bibliographic description of rare books*. Washington, D.C., Library of Congress, 1981 (以下 BDRB) と、その邦訳『稀観書の書誌記述』国立, 一橋大学社会科学古典資料センター, 1986. (一橋大学社会科学古典資料センター Study Series, no. 11) に基づいて行います。また、BDRB の最新版である *Descriptive cataloging of rare materials (books)*. Washington, D.C., Library of Congress, 2007 (以下 DCRM (B)) の変更点についてもできる限り触れることにします。

2. 目録規則

古典資料センターでは、古版本の目録作成時に主に以下の目録規則類を使用しています。

- ・『英米目録規則 (第 2 版日本語版)』(AACR2) 東京, 日本図書館協会, 1982.
- ・『稀観書の書誌記述』国立, 一橋大学社会科学古典資料センター, 1986. (一橋大学社会科学古典資料センター Study Series, no. 11)
- ・Anglo-American cataloging rules. 2.ed., 1998 revision. Chicago, American Library Association, 1998.
- ・Bibliographic description of rare books. Washington, D.C., Library of Congress, 1981.
- ・Descriptive cataloging of rare books. 2.ed. Washington, D.C., Library of Congress, 1991.
- ・Descriptive cataloging of rare materials (books). Washington, D.C., Library of Congress, 2007.
- ・『目録システムコーディングマニュアル』東京, 国立情報学研究所.
- ・『目録情報の基準 第 4 版』東京, 学術情報センター, 1999.

総合目録データベースに洋書の目録を登録する際には、『英米目録規則（第2版日本語版）』（AACR2）と『目録システムコーディングマニュアル』を使用しますが、センターでは西洋古版本に特有の事項を書誌記述に反映させるため、カード目録の時代から AACR2 だけでなく『稀観書の書誌記述』を目録規則として用いてきました。

『稀観書の書誌記述』は、18世紀以前に印刷された出版物や、手刷り印刷本などの目録作成に使用することを想定して、AACR2 における初期刊本に関する規程（2.12-2.18）を拡張して作成された *Bibliographic description of rare books*. Washington, D.C., Library of Congress, 1981 の邦訳版です。この規則は現在までに2回改訂を重ねており、第2版が *Descriptive cataloging of rare books*. 2nd ed. Washington, D.C., Library of Congress, 1991、最新版が *Descriptive cataloging of rare materials (books)*. Washington, D.C., Library of Congress, 2007 です（それぞれタイトルが異なるので注意）。

『稀観書の書誌記述』の特徴として、もともと古版本の目録作成を前提として作られた目録規則のため、タイトルや出版者、製作者の記録などについて、古版本独特の様態に応じて緻密に記述することが可能な点が挙げられます。また、基本的に AACR2 に準じる内容であることから、目録作成に AACR2 を使用している館であれば、容易に導入が可能な点もメリットのひとつです。ただし、AACR2 と細部で異なる部分や、相反する規定もありますので、これらに基づいて書誌を作成する場合には注意が必要です。講義では、実際の資料を題材に古版本の目録作成を行っていきます。

3. 目録作成

古典資料センター所蔵の *I. A. Comenii Ianua aurea reserata quatuor linguarum ...*. Lugd. Batav., Ex officina Elseviriorum, 1640. 【貴A:3929】（図表1,2）を題材に、書誌作成時の注意点を考えます。（反転は『稀観書の書誌記述』の規程）

<TR>

- ・レイアウトから一見してタイトル、著者名を見て取ることができることが多い現代の出版物と異なり、古版本では、しばしば多くの情報が切れ目なく連続してタイトルページに並べられた。また、課題資料のように「著者～の...」などの形で、タイトルに著者名が組み込まれる形式もしばしば見られた。

*1.1 “I. A. Comenii” = 「コメニウスの」：書名に掛って著者名を表している。

→属格で掛っている場合タイトルと分離できない。

*1.13 “a Nathanaele Dhuez ...traducta” 「ナタナエル・デュエスによって...翻訳された」の部分が責任表示

- ・ロング s と f を間違わないように気を付ける。横棒が右に突き抜けているのが f。

*1.6 “Compendiofa” × “Compendiosa” ○

- ・“I/J”、“U/V/W”の転記に注意する。（OH.）

*1.2 “Ianva avrea” → “Ianua aurea”

- 本タイトルは一般に短縮しない。例外として、本タイトルが極めて長く、かつ情報の本質を損なうことなく短縮できる場合は、重要でない語または句を省略できる。

(1B8.)

(AACR2 1.1B4. 長い本タイトルは、不可欠な情報を損なわない場合に限って、縮約する。)

- 責任表示は一般にすべてを記録する。個人または団体の名が非常に多数であるときは、4人以上は省略し、3人目までを記録する。(1G5.)

(AACR2 1.1F5. 単一の責任表示中に4人以上の個人または団体の名称が含まれる場合は) ...最初の一人もしくは一つだけを記載し、他はすべて省略する。)

<ED>

- 版表示、またはその一部分をタイトルページ以外からとったときは、その情報源を注記エリアに示す。(2A2.)

- 別刷 (issues) または刷 (impressions) に関連する表示は、その出版物が以前の版と変わっていても版表示として記載することができる。(2B2.)

(コーディングマニュアル 4.2.2H1 ...版の表示があっても、それが単に「刷」を意味するようなものであるならば、その情報は ED フィールドに記録してはならない。)

<PUB>

- 15-16 世紀の刊本では、写本時代の慣習から出版者・印刷者情報が奥付に記載されている場合がある。出版などのエリアのどの部分でもそれをタイトルページ以外からとったならば、その情報源を注記エリアで示す。(4A2.)

- 出版者などの名は、完全な正字法形式で、かつ文法的事実（先行する必要な語句とともに）によって転記する。(4C2.)

(AACR2 1.4D2. 出版者名、頒布者名などは...最も簡潔な形で記載する。)

- 出版者に関連する表示が二つ以上あるときは、一般に、表示されている順序ですべてを記録する。(4C6.)

(コーディングマニュアル 2.2.3F1 出版地、出版者等が複数表示されている場合は、顕著なもの、最初のもの順で、記録する。...2 番目以降は「選択」である。)

- 出版地の名の前にある前置詞は転記中に含める。(4B2.)

(AACR2 1.4B4. 土地、個人、団体の名称は、付随している前置詞を省略してそのまま記載する。)

- 2 つ以上の場所が示されていて、それが同等の重要性をもち、かつその場所がすべて同じ出版者、頒布者または印刷者に関連しているときは、そのすべてを記録する。

(4B6.)

(AACR2 1.4C5. 出版者、頒布者などの事務所が2箇所以上にあり、それらの地名

が記述対象に表示されている場合は、最初に出ている地名を常に記載する。...その他のすべての地名は省略する。)

- ・ 出版地が略語で表示されている場合は、その表示のまま記録して、略語でない形を付記。

Lugd. Batav. = Lugdunum Batauorum = Leiden

*PUB: Lvgd. Batav. [Leiden]

- ・ 『稀観書の書誌記述』においては、印刷者の名前や場所は、出版者・頒布者のそれと同等の位置付けが与えられている。印刷社の名がタイトルページに表示されているときは、別に出版者表示があるなしに関わらず、記録する。(4C2.)

(AACR2 1.4G1. 出版者名が不明の場合は...製作地および製作者名を記載する。)

- ・ 年を示すローマ数字を、それが誤りであったりミスプリントでないかぎりアラビア数字にかえる。(4D1.)

ローマ数字の表記 : M=1000, CIO=1000, D=500, IO=500, C=100, L=50, X=10, V=5

*CIO IO C X L=1640

<PHYS>

- ・ 1800 年以前の出版物については、版型を決定できるときは必ずそれを付記する。

(5D1.) *(8vo)=8 折版

- ・ 印刷のない丁またはページ、広告類も数量の表示に含める。広告類を記録した場合は、必ず注記でそれを示す。(5B1.)

(AACR2 2.5B3. なくてもよいもの (広告、白紙ページなど) で番号づけのない部分は無視する。)

*PHYS: [24], 321, [279] p.

<VT>

- ・ <TR>の記述は、“I/J”、“U/V/W”の転記により資料の表示形と異なるため、VT:TT に転記する前の表示形をそのまま記述し、アクセスポイントを作成する。

<NOTE>

- ・ その著作の書誌的来歴について注記する。(7C7.)

*NOTE : The first of the Elzevir editions of the Janua

- ・ 色刷りが重要な特質を備えていれば注記する。インキュナブラの色刷りは必ず注記する。(7C10.)

*NOTE: Title in red and black

- ・ 挿図のより完全な細目を記載する。(7C10.)

*NOTE: Title vignette (printer's device with motto “Non Solus”)

- ・ ページ付けの誤りを注記。

*NOTE : Errors in paging: 207 numbered 205 (2nd group)

古版本の書誌作成でも、注意すべき点は一般書と大きく変わりはありません。①情報源から必要な情報を正確に読み取り、②読みとった情報をもとに正しく書誌の同定を行い、③適用する目録規則に基づいて正確に書誌の記述を行う、という基本的な作業が常に重要です。ただ、古版本の場合、この一連の流れがスムーズに進むことを妨げる要素がそこかしこにありますので、こういった点が支障となるかを知っておくことが、目録作成の一助となるでしょう。当日の講義では、日常の目録作業でじっくり見ることの少ない装丁やプリンターズ・デバイスなどについても、少し詳しく見ていきたいと思います。

I. A. COMENII
IANVA AVREA
R E S E R A T A
QVATVOR LINGVARVM,

S I V E

Compendiosa Methodus

LATINAM, GERMANICAM,
GALLICAM & ITALICAM

Linguam perdiscendi, sub Titulis centum, Pe-
riodis mille comprehensa, & Vocabulis
bis mille ad minimum aucta;

Cum quadruplici Indice,

A

NATHANAELE DHVEZ,

in Idioma Gallicum & Italicum traducta.



Simon

LVGD. BAT.

Ex Officina Elseviriorum.

c l o l o c x l .

Cum Privilegio.



IANVA
LINGVARVM,
referata Aurea.

Die eröffnete oder
auff-geschlossene Vul-
dene Sprachen-thür.

I. Introitus.

Der Eingang.

1. SALVE LECTOR A-
mice. **S**ey gegrüßet, secundtlicher
ber Leser.
2. Si rogas quid sit eruditum
elle? responsum habe, nolle
rerum differentias, & posse u-
numquodque suo designare vel
insignire nomine. **S**o du fragst/was da sey gelehret
seyn? So habe zur antwort: es sey
der dinger vnderscheidt wissen/ vndt
ein jedes mit seinem nahmen nen-
nen oder bezeichnen können.
3. Nihilne præterea? Nil cer-
tè quicquam. **N**ichts dann mehr? Reht war-
sch gar nichts.
4. Totius eruditionis posuit
fundamentum, qui nomenclat-
uram rerum naturæ & artis
perdidicit. **D**er hat der ganzen oder aller
geschickthgkeit grundt geleyet / wels-
cher die nahmen-nennung der Na-
tur vndt der kunst, sachen fertig ge-
lehret hatt.
5. Sed (atqui) id difficile for-
san? **U**ber das ist villeicht schwer?
6. Est: si inuitus feceris, aut
præueniente & præconceptâ
imaginatione te ipsû terrueris. **Z**a/ es ist also / wann du es vn-
willig vndt wider deinen willen
thun/ oder mit vorgestarter meinung
dich selbstn schrecken wirst.
7. Tandem, si quid asperita-
tis erit, initio erit. **E**ndtlich so was schwer / rauh
oder vnlieblich seyn wirdt/so wirdts
anfänglich seyn.
8. Annon & literarum cha-
racteres ac ductus pueris primo
intuitu mira monstra & por-
tenta videntur? **S**cheinen nicht auch der buch-
staben zeichen/ form vndt züge den
kindern im ersten anblickt seltsame
wunder zu seyn.
9. At ubi paululum impen-
derint **W**o oder wann sie aber etw we-
ng



L'EXCELLENTE
PORTE DES
Langues ouverte.

L'ECCELLENTE
PORTA DELLE
Lingue aperta.

L'entree.

L'entrata.

- D**I EU te gard, cher amy Le-
cteur. **I**ddio ti guardi, caro amico
Lettore.
- Si tu demandes que c'est que d'e-
stre sçavant? aye pour responce, que
c'est sçavoir les differences des cho-
ses, & pouvoit marquer ou nom-
mer une chascune d'icelles par son
propre nom. **S**e tu domandi che cosa sia l'es-
ser' erudito letterato & ammae-
strato? habbi per risposta, il ben
saper le differençe delle cose, e'l po-
ter segnare e notare ogniuna dal
suo proprio nome.
- N'y a-il rien d'avantage? non cer-
tes, rien du tout. **N**iente altro di più, oltra di
questo? Non certo, nulla affatto.
- De route Science & erudicion a-
mis & posé le fondement, celuy qui
a parfaitement bien appris la No-
menclature des choses naturelles &
artificielles. **D**i tutta dottrina scienza &
eruditione ha possto il fundamen-
to, chi perfettamente ha impera-
ta la nomenclatura delle cose na-
turali & artificiali.
- Mais cela est peut estre malaisé &
difficile? **M**a cio è forse difficile e ma-
laguole? * egra-
- Ouy, aussi est il, si tu le fais envy
& malgré toy, ou si par une préal-
table, & preconceue imagination
(un préjugé) tu t'espouvantes toy
mesme. **S**i ben, se lo farai malvolon-
tieri* & contra tua voglia, o se con mala
con una preueniente e preconcepta
voglia.
opinione, tu ti spauenti & im-
paurisci te stesso. **C**ontra
ton gré.
- En fin* s'il y a quelque aspreté
ou rudesse, elle sera au commence-
ment. **F**inalmente, se vi sarà qual-
che asperità, o ruvidezza ella sa-
rà al principio. * Finale-
- Aussi les caracteres & traits de
lettres ne semblent ils pas de premiet
abord des merueilleux monstres, &
des choses estranges aux enfans?
Mais apres qu'ils y ont employé
un **E**i i caratteri e tratti delle let-
tere, non paiono anco quelli di
prima vista marauigliosi mostri
& portentosi a' fanciulli?
Ma doppo hauerui impiegato
un **A** 2 ali-

古代ギリシアの文字化とホメロス

- アルファベットの始まりと口承伝統 -

古澤 ゆう子

(一橋大学言語社会研究科教授)

古代ギリシアがアルファベット発祥の地でありながら、文字に頼らない口承伝統をながく持ち続けたのは、どうしてか考えてみたいと思います。アルファベット (abcdef・・・) は、現在世界で使用されることのもっとも多い文字と言われますが、この文字の原形 α (アルファ) β (ベータ) γ δ ϵ ζ ・・・を最初に用いたギリシア民族は、民族的叙事詩『イリアス』『オデュッセイア』のみならず、多くの文学作品を何百年も、文書ではなく朗唱というかたちで受け継いできました。またプラトンが彼の哲学対話篇のなかで「読み書き」を批判してもいます。そこで、文字の軽視とも見えるこの伝統の背景を考えます。

アルファベットの歴史を簡単に振り返ってみますと、ギリシア文字は、フェニキア文字を取り入れて、母音表記を導入し、ギリシア語を書き記しやすいように変えたものですが、このフェニキア文字もウガリットで表意文字となったくさび形文字の変形でした。

紀元前 1400 年頃：ウガリット文字（北西セム語系）・表音文字に変更・くさび形文字

→ フェニキア文字

紀元前 1000 年頃：フェニキア文字（セム語系）（右から左へ記述）

→ ヘブライ文字・アラビア文字・ギリシア文字

紀元前 900 年頃：ギリシア文字（印欧語・母音の表記導入）（記述方向様々）

→ キリル文字（露語等）・ラテン文字

紀元前 700 年頃：ラテン文字（印欧語・イタリア半島とローマ所領）

→ 英独仏伊西葡等西洋諸語表記文字

ただし、ギリシア民族の一派であるミュケーナイ人は、エーゲ海文明で用いられた線文字Aを変容した線文字Bを、アルファベットより数百年前の紀元前15世紀に使っていました。線文字Aは、この文字の表記された言語が不明で、まだ解読されていない文字ですが、線文字Bは、20世紀半ばイギリス人マイケル・ヴェントリスによってギリシア語が表記されていると明らかになり解読がすすんでいます。この音節文字は同じギリシア民族ドーリス人がギリシア半島を制覇したのち消え、紀元前900年頃から、印欧語表記に便利で、偉大な発明とも言えるアルファベットが用いられるようになったのでした。

さて、ギリシアの民族的叙事詩でもあり、西洋最初の文学とも言われている『イリアス』は、文字使用が広がるのと同じ頃に成立したと考えられています。文学作品が「成立」したとは奇妙な言い方ですが、これには理由があります。

伝承過程を年表にしてみますと、次のようになります。

史実：トロイア戦争 ミューケーナイ時代 紀元前 1250 年頃

口承伝説：民族移動・ドーリス人進出・ギリシア民族同士の戦い・BC12～9C・暗黒時代

口承叙事詩：ポリス成立・植民地開拓・アルファベット広まる・前 9～7 世紀

『イリアス』（1 万 5 千余行）『オデュッセイア』（1 万 2 千余行）成立

叙事詩文字化固定：アテーナイ本成立・朗唱の法制化・前 6 世紀（550 年頃）

種々の手写本：古典悲劇喜劇全盛・書物流布・前 5、4 世紀

古代文献学：アレクサンドリアの大図書館・文献学者登場・ホメロス校訂本・前 3 世紀

ローマ帝国・ラテン語訳・ギリシア文化衰退

中世写本：東ローマのコンスタンティノーブルの学者の研究と写本・後 9、10 世紀

印刷本：イタリアで初版本・フィレンツェ（1488 年）・ヴェニス（1504 年）

近代叙事詩研究：ホメロス問題（著者はだれか）・18 世紀以後

シュリーマンにはじまるトロイア発掘の結果、ギリシア人がトロイアの都市のひとつを破壊したのは紀元前 1250 年頃と判明しました。これ以後何世紀にもわたって、この戦いをめぐると多くの伝説が口伝に広まっていったと考えられます。この多数の物語のうちいくつかは、文字化されて後代まで伝えられました。約 3 千年を経て現在まで、ほぼ完全な私たちで伝承されたのが、ホメロス作とされるふたつの作品です。トロイアにおけるギリシア軍とトロイア軍の戦闘をうたいあげる『イリアス』と、ギリシアの武将オデュッセウスの帰還を語る『オデュッセイア』です。ホメロスという大詩人の作であると古代から伝えられてきましたが、18 世紀以降、著者はだれか、そもそもホメロスは存在したのかという批判的研究が始まりました。この「ホメロス問題」は、文字化と深く関わります。文字無しで 1 万行以上の試作品の作成が可能かという問題です。

研究の経過を追ってみますと次のようになります。

・ホメロス（批判）問題のはじまり（18 世紀）

『イリアス』中の矛盾が指摘され、無文字時代の長編叙事詩の作成は不可能と主張。

ホメロスの原本とは何か。叙事詩の作者はひとりのホメロスかとの疑問浮上。

・分析派の説

著者は複数だった。または複数の叙事詩を組合せたり附加した編集者が存在した。

・雪ダルマ説

原『イリアス』や原『オデュッセイア』という核に種々の物語が付け加えられて拡大した。

・統一派の説

上記に反対して、両叙事詩の緊密な構成と一貫した構想・意図に注目。

個々の部分は複数の著者によるにせよ、ひとりの天才詩人の構想と主張

文字化をめぐる議論：文字なしに 1 万 5 千余行の叙事詩は成立するか？

無文字社会における驚くべき記憶力と民族口誦詩の存在

例：ユーゴの吟唱詩人 Guslar ・ アイヌのユーカラ

しかし緊密な構成には編集の最後の段階で文字の助けが必要との主張（口述説）

けれども文字の導入直後に 1 万 5 千行が書かれ得たか？（歴大な量のパピルス？）

口承叙事詩研究 (Oral Poetry) :

文字なしの長大な詩作を可能にする口承詩の技法研究。

口承叙事詩は既成の句を組み合わせるモザイク・組み合わせる石はレディーメイドだが、組み合わせは自由・決まった要素を組み合わせて即興で物語りを織り成す技法だった。

口承詩人の職業集団、ホメリーダイに、うたい継がれ、保存された。

時と場所と聴衆の要請に合わせて、長くも短くも内容も変えてうたう歌人集団。

前6世紀後半の文字化は、パン・アテーナイア祭でのホメロス吟唱制度のため。

口承文化

この研究成果からみえてくるのは、ギリシア民族がホメロス叙事詩を、書かれ読まれるものでなく、朗唱し聴くものとみなしていたことです。文字化も、ポリスの祭事における吟唱テキストに正確を期するためであり、読み物として流布させるためだけではありませんでした。受動的に聴くだけでなく、多くの人が詩行をおぼえて、折々に口ずさみました。この姿勢は文字の軽視というより、語りの重視といえるのではないのでしょうか。もちろん識字率は高くなく、手写本の流布にも制限がありましたが、そのためだけでなく、文字に対する原理的な態度が関係していたと考えられます。そのひとつが、プラトンに見られるような批判です。

対話文化

プラトンの哲学対話篇における文字批判をみてみます。

たとえば『パイドロス』で、ソクラテスが創作神話を語ります。

エジプトの神タムゥスは、文字の発明者に向かって言った。「人々がこの文字というものを学ぶと、記憶力の訓練がなおざりにされるため、その人達の魂の中には、忘れっぽい性質が植え付けられることだろう。書いたものを信頼してものを思い出すのに自分以外のものに彫りつけられた印によって外から思い出すようになり自分で自分の力によって内から思い出すことをしないようになるからである。あなたが発明したのは、記憶の秘訣ではなくて、想起の秘訣なので、あなたがこれを学ぶ人たちに与える知恵というのは、知恵の外見であって、真実の知恵ではない。彼らは、親しく教えを受けなくても物知りになるため、多くの場合本当は何も知らないでいながら、見かけだけはひじょうな博識家であると思われるようになり、知者になる代わりに知者であるといううぬぼれだけが発達する。」(275a-b) (『プラトン全集5』岩波書店)

また、ソクラテスは次のようにも言います。

「書くことは絵画の場合と似ている。君が何かをたずねてみると、いとも尊大に沈黙して答えない。・・・言葉というのは書き物にされると、どんな言葉でも、それを理解する人々のところであろうと、ぜんぜん不適當な人々のところであろうとおかまいなしに、転々と巡り歩く。ぜひ話しかけなければならない人々にだけ話しかけ、そうでない人々には黙っていると言うことができない。」(275d-e)

そして、書くことや読むことではなく、双方が向き合って話す対話が重視されるべきであると説きます。これは、プラトンが哲学書を対話篇という形で書き残した理由でありました。書き物批判をしたにもかかわらず、多くの著作を残した彼は、自説を一方的に述べる形式をとらず、師ソクラテスと弟子たちが、問い問われ、批判し批判されながら、知を求める(愛知=哲学 *philosophia*)する対話の様をもって、哲学を説いたと思われま

こうしてみると、古代ギリシア人は、文字の便利さを悟って、アルファベットを案出したからこそ、文字に頼りすぎる危険性を知っていた。また文字を使いこなしていたからこそ、その欠点を見抜いていたと言えるかも知れません。アレクサンドリア大図書館を建設し、文献学・図書学をはじめた人々の文字観念・書物観念として興味深いと考えます。

ウィリアム・モリスから受け継ぐもの

出雲 雅志

(神奈川大学経済学部教授)



ウィリアム・モリスの法則といわれているものをご存じでしょうか。本の見開きページの印刷位置、つまり上下左右の余白にかんするルールのことです。「内側の余白（のど）をもっとも狭くし、天はそれよりいくぶんか広く、外側（前小口）はさらに広く、そして地を一番広くとるようにしなければならない。……（字間や行間の）間隔と（版面の）位置の問題は、美しい書物をつくるのにもっとも大切なことである」とモリスは「ケルムスコット・プレス設立趣意書」に書いています。といってもこれはモリスの独創ではありません。モリスが15世紀の初期印刷者たちの手法を研究するために蒐集した中世本は、例外なくすべてこの規則どおりにつくられていたのです。

読みやすく美しい「理想の書物」を自らの手でつくりだそうとしたモリスは、印刷の実務に通じたエマリー・ウォーカーの協力のもとに、3種類の活字を新たにデザインし、良質の手漉き紙をみつけ、インクを取り寄せ、手引き印刷機を備えた私家版印刷工房ケルムスコット・プレスを1891年に設立します。ケルムスコット・プレスの2代目の秘書を務めたシドニー・コッカレルのリストによると、7年のあいだにここで、エドワード・バーン＝ジョーンズによる87点の挿絵とモリスがデザインした装飾頭文字や縁飾りに彩られた『チョーサー作品集』をはじめとする、53点66冊、紙刷本だけで総冊数21,605部が刷られました。



ウィリアム・モリス (William Morris) は、1834年にロンドン郊外で生まれ1896年にハマスミスで亡くなるまで、芸術、デザイン、染色、織物、詩、文学、ビジネス、社会運動など、驚くほど多方面にわたって天賦の才を発揮し活躍しました。ケルムスコット・プレスは、若いときから中世の書物に関心を寄せ本づくりに魅了されていたモリスが、その最晩年に力を注いだ仕事のひとつです。しかしモリスがめざしたのは、好事家の趣味の達成や中世本のたんなる模倣などではありません。また、機械による安価で悪質な本の大量生産から書物を救いだすことだけが目的だったわけでもありません。

ではモリスにとって『理想の書物』とは何だったのでしょか。その編者序論でウィリアム・ピータースンが示唆したのは、次のようなことです。——モリスは芸術作品となるような書物を生みだしたいと心から願ったにちがいない。だが、それよりも彼の頭を占めていたのは、近代社会における人間的な価値全般の喪失という問題だった。中世建築が中世の職人の自由と幸福の結晶だったことを見抜いたジョン・ラスキンは、ゴシックの大聖堂の背後にある芸術的、社会的、経済的価値をよみがえらせようとした。ラスキンと同じように、モリスもそれらを中世の書物のなかに見出した。だから「版面に秩序を与えること」が、モリスにとっては人間の存在に意味を与えるためのひとつの方法だったことを知らなければ、その美しさの意味は半分しか理解できないだろう。



モリスの多様な仕事は、イギリスのアーツ・アンド・クラフツ運動をはじめ、19世

紀末にパリで旗あげしたアール・ヌーヴォー、ウィーンで始まったゼツェション（ウィーン分離派）運動、1919年にワイマールにおこったバウハウスの工芸運動のほか、日本では柳宗悦を中心とする民芸運動にも大きな影響を与えました。モリスを泉源とするさまざまな波紋は、いまなお世界のいたるところで発見できます。しかし注意しなければならないのは、これらすべてが明確な思想と目標をもった「芸術運動」だったという点です。

モリスというと芸術家やデザイナーとしての側面のみが強調され評価されがちですが、モリスは産業社会を鋭く批判し、社会運動にも熱心に取り組んだすぐれた思想家でもありました。1870年代後半には、古建築物保護協会や東欧問題協会の中心メンバーとして活動をはじめます。また1883年にはヘンリー・ハインドマンが率いる社会民主連盟に参加し、翌年には連盟を去ってマルクスの末娘エリノア・マルクスらとともに社会主義同盟を結成しました。さらにこの同盟が解体へ向かうと1890年に同盟の支部をハマスミス社会主義協会と改名し、ここを拠点に最後まで社会主義運動をつづけます。

社会運動に積極的に関わったこの20年のあいだに、モリスがイギリス各地で行った講演は600回をこえました。それだけではありません。モリスは、機関誌発刊の経費を負担し、街頭で売り、論文を寄稿し、編集にもあたりました。デモ行進を行い演説もしましたが、逮捕され罰金を払わされたこともあります。その率直で一貫した態度と行動によって、モリスは立場の異なる人たちからも尊敬されたと言われています。しかしなによりも重要なのは、社会の不正や腐敗、貧困や戦争をなくすための活動と多彩でゆたかな多くの作品を創作することとが、モリスのなかで切り離しがたく結びついていたということです。



書物を建築にみたてたモリスは、1889年の講演「ゴシック芸術」で、14世紀のゴシック建築様式の成立について次のように述べています。

「ゴシック様式は、アーチが発明されて以来、アーチに正しい尊敬を払い、それを隠すのではなく、筋のとおった確かな仕方で装飾をほどこした最初の様式である。これだけでもたいしたものだが、それを獲得した完全な自由はそれ以上であって、この様式のもつ率直さの源泉である。……ある様式が成立するには法則が必要だが、それは自由意志から、しかも無意識のうちに法則にしたがったのである。……人間の手のなしうる最大の完成である滑らかさをそれは愛するが、材料か技術かのうでそれが不可能な場合でも、その加工不十分な粗野な仕事も創造性を暗示するようにつくられていて、われわれを楽しませる。古典時代の鉄の法則、偉人のほかはすべて奴隷にしてしまう鉄則は去って、自由がこれにとって代わったからである」。

ゴシック建築様式にみられる自由でたのしい創造は、自由のための社会的闘争に立ちあがったギルド職人が、同時に建築の「協同的調和に手と精神を従わせる自由」をもっていたからだともモリスは言い、これこそが「ゴシック建築の精神」だと主張しました。ものをつくる自由と民衆の抵抗の精神の自由とが重ねあわされ、つくったひとたちのよろこびが伝わってくる美しさを生み出したのは、資本主義によって破壊される以前に存在した自由で創造的な職人の手とこころだったというのです。

この自由と抵抗の精神は、狭義の建築だけにかぎられるものではありません。彫刻や絵画といった大芸術に対してモリスが小芸術と呼んだ「日常生活の身のまわりを美しく

する」芸術すべてにあてはまります。私家版印刷工房ケルムスコット・プレスもそのひとつでした。モリス主義者だった小野二郎の言葉をかりれば、ものの有用性とその形式が分かちがたく結びつき、人間と物質とのゆたかな関係が築かれたときに初めて自由と美しさが感得され、他人に優越感をもったり他人を支配したりすることから生じるようなものとは根本的にちがった本当のよろこびが感じられるのだとモリスは考えていた、ということになるでしょう。



モリスが中世の芸術に見出したものを、モリス自身は近代社会のなかでつくりだすことができたのでしょうか。信じられないほど多様で多彩なモリスの仕事とその62年の生涯は、むしろ近代社会の現実と矛盾に直面した苦悩や苦闘の足跡を物語っているようにみえます。しかし、それらが失敗や敗北の道のりだったとしても、けっしてあきらめずに困難な実践にくり返し挑んだということにこそ、学ばなければならない点があるように思います。

当時、英語圏でベストセラーとなった『顧みれば：2000年から1887年』でエドワード・ベラミーが描いた未来の理想社会を「国家への徹底した中央集権化によって動かされている国家共産主義」「機械生活そのもの」と痛烈に批判し、モリスがこれに対置したのが『ユートピア便り』でした。そこには現実世界の組織や技術、価値観とは正反対の新たな社会像と人間像が描かれています。

「われわれがつくるものは、必要とされるからつくられるのです。ひとびとはまるで自分自身のためにつくっているかのように、隣人たちに使ってもらうためにもものをつくります。まったく何も知らない、こちらの手のまったく及ばない正体不明の市場のために生産するものではありません。……本当の使用目的以外にものがつくられるということはありません。だから劣悪なものはつくらないのです。……無用なものを大量に生産しなくてもすむので、われわれにはものをつくるよろこびをじっくり考えるだけの余裕もあれば資材もあります。手でするのが退屈な仕事はすべて機械で行われますし、手でするのが楽しい仕事はすべて機械を用いずに行われます。……われわれがやるすべての仕事は、多少とも楽しみながら行う心身の活動なのです」。

この理想社会の住人に「労働の報酬は生きることそのもの」「創造という報酬」と語るモリスを、現実離れした夢想家だと批判するのは難しくないかもしれません。しかし『ユートピアの思想史』を著したマリー・ルイズ・ベルネリは、『ユートピア便り』の魅力は「物語全体に流れている美、自由、静寂、そして幸福そうな雰囲気」のなかにある。……この作品は絵のよしあしを評価するのと同じように、全体をとおしめてみることによって判断されるべきだ」と主張しています。それは、不寛容で権威主義的なほとんどのユートピアのなかで、モリスのユートピアは数少ない例外だと指摘したベルネリが、未来社会の精巧な設計図を提示することではなく、ひとびとの「こんな社会に住んでみたい」「このような人間になりたい」という共感や感受性をよびおこすことこそ、現実社会を根底から批判する精神を培ううえでもっとも大切だと信じていたからだと思えます。

モリスは、未来を夢みただけの夢想家だったのでも、過去に郷愁を抱いていたたんなる中世主義者だったのでもありません。現実の矛盾のただなかで、夢と日常生活を重ねあわせながら、理想を語るのではなく、それを生きる、という困難な課題に挑みつづける

ました。ここに、モリスの思想と実践の核心があったといえるでしょう。

西洋古典資料に使われる材料・製本と保存

岡本 幸治

(製本家・書籍修復家)

西洋古典資料は、テキストの重要性は勿論のことだが、歴史的形態が大切な場合がある。折丁構成におけるページ差し替えの有無やブランクページの存在、刷りや版の違いが書誌的に重要な意味を持つ場合がある。出版形態や製本がテキストの社会的評価と結びついて意味を持つことがある。著者や所蔵者による献辞やメモ、線引き、蔵書票なども重要である。

このような形態的特徴は時代的背景や資料の来歴を表していて興味深いものがあるが、利用と保存にとっては問題が多い。製本は画一的でなく一点ごとに構造や機能、装丁材料が異なっていることが多い。表紙がはずれる、表紙の革が傷んでいる、見返しが見切れている、綴じが傷んでいる、本の開きが悪い、ページが破れている、ページがとれている、ページが変色している、虫やカビの害がある、などの問題が発生する。そのままでは利用できない、または利用することで更に破損が進む恐れのある場合がある。問題が顕在化していない場合を含めて、所蔵する西洋古典資料全体の現在と将来に渡る利用を組織的に保証するために、計画化された効率の良い修理や保存の手段が必要であろう。修理と保存の手段には資料への働きかけ方の様々なレベルがある。資料への働きかけが強まれば、資料の原状に変更が生じる可能性が高まる。実際にどのような作業を行うのかは、破損状況だけではなく資料価値、利用頻度、代替利用の可能性、予算規模などを勘案して保存政策の中で決定すべきである。

今回は歴史的製本に用いられる材料—紙、ボール紙、糸、皮革、布など—とその使われ方に焦点を当てて、物質的特長を踏まえた西洋古典資料の保存について考える。

本文用紙と見返し用紙

紙には印刷に使用された本文用紙と製本時に付加される見返し用紙とがある。本文用紙の材料はほとんどの場合が麻である。麻には各種あるが主として亜麻と大麻とが使用されている。西洋の手漉き紙では、亜麻や大麻のボロを利用する。ボロを小さく裁断して発酵させ、水車を動力とした木製の槌で繊維をほぐして紙を漉く。漉き桁の箕は金属の針金で出来ていてしばしば透かし文様が組まれている。透かし文様によって紙を漉いた地域や年代を特定できる場合がある。紙の用途は印刷に限られていないので、にじみ止めの加工が施される。ニカワと明礬が使われる。にじみ止め加工液の濃度が高いと紙の変色を招くことがある。紙は糸に吊るして乾燥するので、湿気による影響を受けやす

い。鎖目に対して直角方向に伸縮する傾向がある。このようにして作られた手漉き紙を調達して印刷が行われる。

古版本の印刷は全頁が1度に印刷されるわけではなく、一定のページを印刷すると活字をほぐして組み直し、残りのページを印刷する。1枚の紙の表裏に4ページ分が印刷されるとフォリオ判になる。インキュナブラでは空印刷に注意が必要である。紙のシワの上に印字される場合がある。標題紙を印刷し直すこともあり、その場合は標題紙のページだけが後から貼り付けられる。印刷の途中で紙を仕入れ直すこともある。紙の質—材料やにじみ止め加工—が同一ではなく、一部の紙だけの変色を起こす場合があり隣接するページにも影響が及ぶ。印刷インクに不都合がある場合には、版面の変色を招く。

印刷された紙が製本工房へ届けられると、印刷された紙を折りたたんで折丁のかたちにする。印刷インクが十分に乾燥してからページが正しく連なるように折る。1度折って二つ折り(フォリオ)判、2度折って四つ折り(クォート)判、3度折って八つ折り(オクタボ)判。次いで折った紙を叩く作業がある。平滑な表面の石の上で大きなハンマーで紙の表面を叩いて全体を平にする。締め機とも併用され、19世紀にラミネーターが導入されるまで、紙叩きは続けられた。本文紙は見返し用紙とともに綴じられて製本される。

見返し用紙は製本時に付加される紙である。出版と製本の時代が異なることも多い。たとえ同時代の製本であっても、同じ紙を使うことはほとんどない。性状の異なる原料で繊維の配合比や処理の仕方が異なり、漉く場所や道具、紙の厚さなどの異なった紙が見返し用紙として用いられる。さらに製本時に紙の折り目の方向が異なるように使われる場合もある。分りやすいのは透かし文様を観察できる場合である。透かし文様には、紙漉き工房のマークや場所の名前、紙の等級、紙漉き年代などが入っていることがあり、透かし文様によって製本された時代を同定できる場合がある。透かし文様事典や最近では透かし文様のデータベースが利用可能である。インキュナブラでは見返しに羊皮紙が使われる場合がある。また、17世紀以降は装飾を目的とした見返し用紙にマーブル紙やペースト・ペーパーなどの装飾紙が使われた。マーブル紙には時代によって特徴的な色や模様をもっているものがあって、ある程度の時代を特定できる。

本を綴じる。表紙をつける。

初めから本格的な製本が行われるとは限らない。簡易な「仮綴じ」製本になる場合が多く、本(折丁)の背(折り目)の一部だけを針と糸で綴じて紙の表紙でくるむ。「仮綴じ」は「待ちの製本」とも言われ、流通過程で出版物が散逸しないように最低限の製本を行ったものである。その後に本格的に製本されることで今日まで保存され残されることが多い。たまたま「仮綴じ」のかたちのままで残った資料は出版時の原形を伝えて貴重であるが、頻繁な利用に耐える製本構造とは言えない。利用することで劣化が進行すると予測され、利用方法に注意が必要である。

本格的な製本の場合は支持体(背とじ紐)を使って折丁を綴じる。支持体を使うことで本のブロックとしてのまとまりが保証され、支持体を使って表紙ボードとの接続が行われる。「とじつけ製本」である。綴じ糸の太さで折丁の背が高くなり、背の丸みを作りやすくなる。現代では折丁の紙の質や厚さ、数などの違いによって太さの異なった綴じ糸を選ぶことが出来るが、往時は糸の種類が少なく、しばしば「抜き綴じ」が行われた。本の背の端からもう一方の端まで糸を運ぶあいだに2つないし3つの折丁を綴じる。支持体を使うことで可能になる技法である。作業時間の短縮にも役立った。製本が健全なうちは何の影響もないが、繰り返し利用されて綴じが傷み始めてからは劣化の速度が早まる。

支持体の本数や太さは時代によって異なる。支持体を折丁の外につけて「背バンド」となる場合と、支持体を折丁の内に埋め込んで平滑な背になる場合とがある。「背バンド綴じ」の場合は、原則として綴じ針で直接穴をあけながら糸を運ぶ。背バンドのない「かがり綴じ」では、支持体を埋め込むために「目引き」を行う。「背バンド綴じ」と「かがり綴じ」とでは糸の運針が異なり、保存性が異なる。

表紙ボードに使われたのは中世では様々な木の板であった。16世紀頃から反故紙などを貼り合わせたボール紙が使われるようになる。地域によっては木の板が17世紀頃まで使われ続けた。18世紀になるとロープを原料とした非常に硬いボール紙が使われ始めたが、現在ではワラを主原料とした黄ボール紙や工業的に作られている様々なボール紙が製本に使われている。ボール紙は表裏ともに表装材や見返し用紙などで被われているために、劣化がほとんど観測されないとされている。ただし水の被害にあったり、表装材や見返し用紙が欠損したり分離している場合には劣化している事例が多々ある。

製本された本の小口に装飾がほどこされていることがある。金箔、絵具、マーブルなどが使われる。小口装飾のためには小口を綺麗に断裁することが必要である。中世では大柄な刃物を用いた手工断裁であったため平滑な小口が得られなかった。15世紀末に小口断裁機プラウが登場したと考えられている。プラウによって平滑な小口断面が得られて、様々な装飾が可能になった。本を寝かせて保存していた時代には小口にタイトルが表記された。小口を手前に本を立て置いた時代は小口装飾が華やかである。金箔を貼る、型押しを施す、色を塗る、マーブルで染める、絵を描く、これらを組み合わせるなど様々な技法がある。このような本では小口の断裁を避けるのが望ましく、綴じの解体も控えたい。

花ぎれは主として紙の硬い芯に絹糸を巻きつけて編む。折丁にも糸を刺して花ぎれを固定する仕組みである。紙の芯に柔軟性がないので背が柔らかく本の開きが良い本では花切れが破損しやすくなる。花ぎれは装飾以外に、背表紙の内側に発生する「チリ」を充填して補強する役割がある。特に背表紙芯紙のない「背バンド綴じ」の本では重要性が増す。しおり紐は絹製が多いが、染料によって紙の変色を生ずることが多い。

表紙を貼る－皮革、布、紙－

表装材に使われるのは皮革、布、紙などである。皮革の「皮」は鞣していない「皮」のことで羊皮紙がそうである。皮革の「革」は鞣した「革」のことで大部分の革装本の革がこれにあたる。羊皮紙は動物の皮を石灰に漬けて不要な部位を取り除き木枠を使って引っ張ったまま乾燥して表面加工をする。羊だけが羊皮紙ではなく、山羊や子牛などの皮が使われる。動物性タンパク質の線維を強く引っ張ることによって腐らない組織に変化する。湿気に敏感で水分を吸って伸びて波打ち現象を起こし、乾燥によって縮み元のサイズよりも小さくなる。中世写本の製本は重い木の板の表紙に留め具が付いて羊皮紙のページを押さえている。16世紀以降の羊皮紙装の製本では、羊皮紙を紙で裏打ちして使う例が多い。羊皮紙の材質は半透明であり、裏打ちすることで不透明性を増して、表紙貼りの際の羊皮紙の伸び縮みを抑制する狙いがある。羊皮紙は「とじつけ製本」に用いられることもあるが「リンプ装」によく使われている。「とじつけ製本」の場合はジョイント部に劣化が集中する。羊皮紙は現在問題になっている化学的劣化とは無縁であるが、優先的に保存箱に収納するなどの保存環境への配慮が大切である。

鞣し革は植物タンニンで鞣した革である。ある種の木の枝や葉、実などに含まれるタンニンを抽出した液に動物の皮を浸漬して、動物性タンパク質とタンニンとの化学的結合を促して作る。革の断面は茶褐色になる。主として塩基性染料で染色されるために日光堅牢度が低く「色褪せ」しやすい。タンニン革は水となじみが良い。水を良く吸収して革がとても柔らかくなる。表紙貼りはデンプン糊で行われるが、多量の水分を含むため革が柔らかくなりボール紙の裏側への折り返しが容易であり、背バンドの凹凸を形成するのも比較的容易にできる。乾燥後は型崩れすることがない。このようなタンニン革の可塑性は箔押し装飾でも利用される。湿らせた革に熱した箔押し用の花型を押して鮮明な型押しをすることができる。タンニン革の熱変性温度は70度～89度とされており、革を湿らしてもこの温度以下で押せば安全である。余剰のタンニンが革の線維間を埋めていて型押しによる革線維の変型を維持していると考えられている。

タンニン革の劣化が問題になっている。主として19世紀後半以降に作られた革の化学的劣化が深刻で革がパサパサの粉状になって崩壊している。19世紀末から革の劣化の科学的調査が行われてきたが未だに劣化の仕組みが解き明かされていない。革の製造工程で用いられる硫酸が劣化の要因とされて硫酸を使わない革が推奨されてきた。また劣化対策として乳酸カリウム溶液を塗布して保革油で仕上げる方法が推奨されてきた。1980年代以降は、このような方法が不十分であることが認識されている。保革油は革の劣化を抑止するものではない。革の劣化要因として窒素酸化物や硫化物が指摘されており革の毛穴を覆うコーティングが提案されている。保革油を塗布すべきではないという主張もある。すでに使われている革の適切な保存方法とこれから使う保存性の高い革との開発が望まれる。

表装材は皮革だけではない。皮革と共に装飾された紙が用いられることが多い。木版

プリントの紙、マーブル染めの紙、糊絵具の紙(ペースト・ペーパー)などが仮綴じ本の表紙や主として 19 世紀以降の半革装製本の表紙に使われている。紙が革のうえに重なる部分ではタンニンによる変色が起きている。布は中世では革以上に豪華な材料として用いられた。革の装飾技術が未発達だったため、特別な織り布や刺繍を施した布が豪華装製本の表装材として使われた。1453 年のコンスタンチノーブル陥落を契機として良質の革が輸入されるようになり、16 世紀以降に革の金箔押し装飾技術も発達して、布装製本はきわめて少なくなった。19 世紀になって工業製品として製本用クロスが開発されて、製本の機械化・工業化の端緒となった。製本用クロスは「くるみ製本」によく使われた。製本の機械化に伴なって綴じも機械化された。針金を綴じの材料としたステーパー綴じは 1880 年代から約 50 年間に渡って行われ、錆びの問題が発生している。

以上のように西洋古典資料は多様な素材が製本という構造に沿って用いられて成り立っている。資料に引き起こされる傷みは形態や構造に起因するものであり、利用によってどのような負荷が発生するのかを指摘することができる。材料の劣化も構造・機能による負荷を経て顕現化するものである。資料を利用することで、どのような負荷が発生し、構造と材料にどのような影響を与える可能性があるのか、現在発生している損傷や欠落・変異などが、そのままにしておけば進行して憂慮すべき段階へと進行するのかなど、現在の利用頻度、利用方法で今後も安全に使い続けることが出来るのかなど、今後の保存方法を検討する上で修復に関する専門的知識と経験を役立てることが重要である。可能な限り資料に変更を加えずに効果的な修理を行う手段を提案しながら、書籍の修理と保存の技術を予防的保存の技術として活用させたいものである。

資料展示への一考察～その5W1H

澁川 雅俊

(元慶應義塾大学環境情報学部教授)

はじめに：資料展示は、「巻物や書物ほかを平らにのべて、ひろげて、人びとに見て貰う」ことである。「人びと」とはごく普通の人たちのことで、ここでは仕事上で西洋社会科学古典とかかわりがある研究者たちは含まない。しかもそれは‘見せびらかし’ではなく、それらを活用して貰うことが本願である。

1 なぜ資料を展示するのか

図書館は日々、資料を集めて、まとめて、しまっておき、人びとの求めに応じてそれを提供している。資料展示の根底にそれがある。資料を人びとに見て貰う理由は、新刊本であると古典資料であるとかかわらず、そのこととしっかりと結びついていなければならない。

図書館は通常、博物館や美術館などと違い、所蔵資料のすべてを書架に配架して利用者に直接提示している。また蔵書目録を介して間接的にもそれらを開示している。しかしそれらの方法をもってしても人知の宇宙を直ちに瞭然とできる人は皆無であろう。そのために図書館は、さまざまなサービスメニューを通じて、広くて、深い資料宇宙へと人びとを誘ってきた。

資料展示は、その様態からすると、‘管見’（あるいは「葦の髄から天井覗く」）の誹りを免れぬかもしれない。しかしその催しを効果的に図れば、書架陳列からではその見え難い宇宙の全貌に人びとを導くことができるだろう。

問題は、‘不要不急’の西洋社会科学古典の展示にいかなる意義を附加するかであろう。端的に言うならば、それは人知の環への想起である。あるいは‘温故知新’を促すということだろう。しかもそれは「普通の人たち」を念頭に置かなければならない。

2 どんな資料展示を行うか？

資料は、その総体で森羅万象を写している。その四字熟語は、「天地の間に存在するあらゆるものごと」を指し、人知の限りであるにしても、広大深淵である。したがって‘管見’の‘管’の穴の範囲の設定は無限である。

ただし「普通の人たち」に興味を持って観覧してもらうためには、それなりの配慮が必要となる。大事なはその人たちに事前に「おもしろそうだ」と思って貰い、事後に「ちょっとしたもんだね」などと感想を貰えるようにテーマを設定することである。

そのためにはまずその人たちの等身大の、日常生活での事物事象の中からテーマを選ぶことが第一である。次いでさまざまなもの、あるいはことから特定のテーマを設定するには、その人たちがいま最も気に掛かっているものごとに焦点を当てることである。それを「流行（はやり）」と一括するならば、それに添うことであろう。もっとも、それに逆らうことも一つの視点である。

展示のテーマを端的に表すのは、展示の題名である。「西洋社会科学古典資料展」では普通の人たちには魅力に乏しい。なぜならば「西洋古典」も「社会科学古典」も彼らが日常生活の中で遭遇するさまざまなものごととのかかわりがないからである。

3 資料展示は、誰がどのように企画・監修するのか？

この問題は、学術図書館で誰が選書すべきかと重なる。つまり研究者（教員、あるいは教官）が資料を選ぶべきか、それとも図書館員（図書館専門職）か、である。それは二者択一の問題ではない。両者が協調して蔵書を構築しなければ、偏狭な蔵書か、芯のない蔵書に陥ってしまうからだ。展示資料の選別においてもそれが要件である。

誰が展示をプロデュースするかは、展示会のスタイルが大いに関係する。展示会には次の基本型のものがある。すなわち、大学の創立記念行事などの一環として開催される特別展覧会、学術研究領域の歴史・動向・課題などに焦点を当てる学術資料展、そして図書館の展示ケースでの常設展示の3つである。

特別展覧会のような大規模なものの企画・監修は組織的に行われる必要がある。「組織的」というのは大学役員・教職員による委員会を設置して対応することを意味する。学術資料展の場合は、研究者が中心になり、図書館員がサポートするのが順当で、図書館内での常設展示は図書館業務の一環であり、必要に応じ研究者などの支援を得るにしても、図書館員が中心対応するのが普通である。

展示会をいつ、どこで開催するか問題は、基本的にはテーマとスタイルによって決定される。特別展覧会は記念すべき年月日が起点となって10年、30年、50年、100年などの年次となろう。学術資料展や常設展示であれば、そのテーマの発端となった年代や重要人物の生没年などが展示開催の契機として相応しい。

どの程度の数の資料を展示すべきか。資料展示を‘管見’による資料宇宙への誘いとすると、人びとに広い天井を仮想させるには、細いにしても、どのような〈管〉を用意するかが重要である。つまり最初に大事なことは、多くとも100点ほど、あるいはそれより少数の資料を選び出して何を語ろうとするかである。まずテーマであり、物語である。人びとに何を訴えたいのかが明瞭でなければならない。適切なストーリーの下で、選び抜かれた珠玉の少数資料を体系的に立体的に展示を構成するという心がけが大事であろう。

資料をどのように陳列するかという問題は、主に展示のパターンによってきまる。図書館や研究所内の展示コーナーやエントランスホールなどで行う、比較的小規模の展示の場合には、備え付けの展示ケース内での資料ディスプレイが中心である。ケースの平台に、あたかも書物の一頁、あるいは見開き二頁に文字言語テキスト（必要に応じ挿画・図版なども含む）とマージンとの黄金比率を実現するように、選ばれた資料を、簡潔な解説文を記したキャプションと共に、配置したい。

4 資料展示にはどんな準備作業があるか？

展示の企画から終了までに基本的には[企画→準備→運営→評価]のステップがある。企画は、何のためにどんな資料展示をどのように開催するかを明確にすることであるが、このステップではさらに、①展示（企画・実行）担当者・組織、②経費予算、③資料保全、④併設プログラム、⑤展示目録・図録刊行、⑥広報、⑦展覧会運営などなどの諸要件についても具体的に立案し、必要な承認を担保しなければならない。なお以上の諸要件の検討は、いずれの展示型においても必ず慎重に検討されるべきである。

常設展示では以上のステップを個人、または数人のチームでじっこうすることになるが、特別展示会などの大規模な展示ではどうすべきだろうか。とりわけ商業的展示会場や大学の大ホールなどで行うような企画では、会場全体の空間デザインが基盤となる。すなわち観覧順路、照明、資料配置法、展示パネル、資料展示ケースなどなどの諸要件を固めた上で、漸くケース内での資料の陳列となる。そのような展示会では、建物を建

てるときに建築設計家に頼むように、催事装飾・インテリアデザイナーに空間全体の装備を発注することが不可欠である。その場合には、専門デザイナーに展示企画の目的、コンセプト、期待している成果などについて十分に説明し、それに対する設計案と見積経費を双方で十分に協議する必要がある。

なおそうした方式で展示会を開催する、つまり催事プロデュースの専門業者に展示会を場合には、究極的には、場設営だけでなく、資料の搬出から搬入、さらに展示パネル・キャプションの制作、展示資料目録・図録の編集・刊行、展示ケースの選択、資料とキャプションのディスプレイなどの準備作業はもとより展示会の広報・運営までの一切を委託することを念頭に企画する必要がある。

さいごに：資料のデジタルアーカイブが進展するにつれ、所蔵の稀覯書や古典資料の画像を図書館や大学のホームページを介して公開するプログラムが盛んになった。それは原資料による展示と同じなのであるだろうか、それとも手法だけに止まらず、全く異なる理念の下になされるべきなのであるだろうか？

経済学の起源—フランスのコンテクストを中心に—

米田 昇平

(下関市立大学教授)

アダム・スミスの『国富論』(1776年)によって、経済学という新しい学問が誕生したと一般に考えられてきました。このスミスの経済学は、基本的に、市場メカニズムに着目した自由主義の経済学であり、理論的には、生産の局面を重視するという特徴を持っています。スミスは人間の境遇改善欲求を所与として、この欲求に応じうる「一般的富裕」の条件をおもに生産の部面で探求し、利潤の節約によって蓄積された資本を追加的に投資に回せば生産は拡大を続けることができる、と考えました。節約・節欲の視点に基づく資本蓄積論に立脚して生産力の自己増殖の論理を導き出した、ということもできます。ところで、経済の基本構造は、生産(供給)と消費(需要)、そしてそれら両局面の規定要因としての貨幣・信用システムからなると考えることができます。この点からみれば自由主義や生産重視を特徴とするスミスの経済学は、ある特定の条件下で経済の構造を捉えたにすぎないと言えます。しかし、スミスの放ったこの強烈な光によって、消費・消費欲求の意義がみえにくくなり、経済学の生成を論じるとき、この側面は視野から遠ざけられがちとなりました。

しかしながら、経済学の生成とかかわってまずもって注目すべきなのは、むしろ消費欲求の本源性に関する認識でしょう。なぜなら、富裕の科学として経済学が生成しうるためには、人間の功利的情念が伝統的モラルの抑制を解かれ、諸欲求の充足に世俗的幸福の原因をみいだす功利主義的な幸福観や、それを容認する世俗的倫理が広く普及していなければならないと考えられるからです。「貧者は救いの道にいる」というような倫理観が支配的な状況では経済学は生まれようがない、ということです。伝統的な神学的世界観からの切断によって生じた価値観の空白を衝いて、一面では、欲求の満足による「生の充満」を容認する新たな世俗的倫理が生み出されていきますが、このような舞台のダイナミックな変転とともに、経済学の生成が促されていったといえます。

したがって、この変転の有り様を照らしだすことで、従来とは異なる視角から経済学の起源に迫り、この起源に関して新たな知見を得ることができると考えられます。おもな舞台は17世紀後半から18世紀初頭のフランス、登場人物は、ピエール・ニコルやジャン・ドマ(あるいはパスカル)、ラ・フォンテーヌやラ・ロシュフコー、さらにピエール・ベールといった人々です。彼らは17世紀後半のフランスに生まれた新思潮の形成に与ることで経済学の生成を促すのに寄与しました。そしてこの新思潮を直接の母胎として生まれたのが、ボワギルベールとマンデヴィルの経済学です。登場人物は実に多彩で、思想傾向も多様ですが、彼らは、程度の差はあれ、共通してアウグスティヌス主義の影響下にありました。彼らは原罪説に拠って立つアウグスティヌス主義のペシミ

ティックな人間理解に基づいて、人間を自己愛・利己心に駆り立てられる欲求の主体とみなし、「利益」を求める人間の功利的情念をクローズアップしましたが、ニコルやドマはさらに進んで、自己愛に発する功利的情念はいかにして秩序を形成しうるか、という「情念と秩序」の関係に光をあてました。この「ヨーロッパ精神の危機（1680～1715年）」（ポール・アザール）の時代にあつて、彼らが示した人間と社会についての新たな見方は、時代精神のドラスティックな転換を告げるものでしたが、それは同時に経済学の生成を促す新たな歴史的コンテキストの出現を示すものでもありました。

*アウグスティヌス主義とは、教父アウグスティヌス（354-430）の思想に集約される神学上の伝統主義のことであり、17世紀は「アウグスティヌスの世紀」と言われるほどに、多くの思想家・宗教家がこれを奉じた。経済学の生成との関連で注目されるべきは、フランスのカソリックの一派で、ポール・ロワイヤル修道院に結集したジャンセニストのアウグスティヌス主義（＝ジャンセニスム）である。対抗宗教改革運動のなかで、ジェズイットがルネサンス以来のユマニスム（人間中心主義）の流れに棹さして、人間的活動の相対的自律性（自由意志の可能性）を承認する方向へキリスト教をいわば世俗化していくのと対照的に、ジャンセニストはそのような時代の傾向を真っ向から批判し、むしろアウグスティヌスの原点（恩寵主義）への回帰を唱える。すなわち人祖アダムの墮罪によって原罪を背負うことになった人間の根本的墮落と無力を強調し、救いに至る道としての人間の自由意志や功績の意義を否定し、人間の救いはもっぱら恩寵によるほかはありえないと説く。そして人間の理性の力を抛り所にするあらゆる理想主義（ストア的美徳、栄光の希求・英雄の賛美など）を、人間の邪悪さや無力さへの無自覚による虚飾・虚栄とみなして徹底的に批判した。墮罪後の人間は無力で墮落し、それゆえもっぱら自己愛に導かれる。ラ・ロシュフコーの次の言説は、アウグスティヌス主義の自己愛がどのようなものかをよく表している。「神は人間の原罪を罰するために、人間が自己愛を己の神とすることを許して、生涯のあらゆる行為においてそれに苦しめられるようにした（二宮フサ訳『ラ・ロシュフコー箴言集』岩波文庫、179頁）。「……自己愛の欲望ほど抗いがたいものはなく、自己愛の意図ほど秘められたものはなく、自己愛の行動ほど巧妙なものはない。その柔軟さは筆舌に尽くしがたく、その変貌ぶりは変身の玄妙を凌ぎ、その精緻は化学を凌ぐ。……自己愛は体質の相違に従ってさまざまな傾向を持ち、それらの傾向が自己愛を時には名誉、時には富、時には快樂へと駆り立て、奉仕させる。……以上が自己愛の肖像であり、全人生はその大きな長い動揺にほかならない」（147-51頁）。

人間本性をもっぱら自己愛にみるこのような理解に立つとき、彼らは、排他的な自己愛に基づく人間の功利的行動がいかにして社会の秩序を導くか、という逆説的状況の解明を迫られることとなります。ニコルやドマが解明しようとした「情念と秩序」の関係

とは、このことです。例えば、ラフォンというモラリスト文学の研究者は、利己心の自由によって最大の公共善がもたらされるとする、彼らの調和の観念はどこからきているかを問い、「罪それ自体を普遍的善に転換するアウグスティヌス主義の不可思議な錬金術」にその由来をみいだしています。ラフォンのいう「転換」の背景にあってそれを促したものは、いうまでもなく、「商業社会」の出現という事実であり、さらにはその事実と表裏の関係にある、脱宗教と宗教自体の世俗化という二方面で進捗する世俗化の一般的傾向でした。この傾向をもたらしたのは、欲望を自己抑制するのではなく、その満足によって世俗の幸福を実現しようと求めるのは決して罪ではないとする世俗的倫理の広範な普及でしたが、それはまた、人間を、本来的に快樂を求める欲求の主体と捉えて、私欲に従うことを人間の普遍的本性とみなす世俗化の論理によって支えられていました。17 世紀後半のフランスに生まれた新思潮の特徴もまた、それが快樂・利益あるいは功利・効用の価値基準に着目したところにみいだすことができます。それゆえ、そこから生まれる新たな倫理・道徳はおのずから功利主義的な性格を有することになります。

そして、この新思潮は功利主義の源流となることでさらに啓蒙と経済学の共通の母胎となりました。一方では、それが育んだ世俗的倫理（功利主義的な幸福観）は、啓蒙の共通因子として 18 世紀ヨーロッパ啓蒙の大きなうねりを引き起こす一要因となりますし、他方では、この世俗的倫理に押し出される形で富裕の科学として経済学という新興科学が生成していきます。ここで念頭に置いているボワギルベールとマンデヴィルは、ともに功利主義的な人間像と社会像に立脚し、社会を欲求の社会と見立てて、消費・消費欲求主導の経済ビジョンを描きました。生産局面を重視したアダム・スミスとは異なる独自の経済学を展開した、ということです。

講義では、以下の順序で、これまで注目されることのなかったフランス起源の経済学の生成・形成について、その概略をお話しします。そこから何がみえてくるのでしょうか。スミス中心の見方からはみえてこない、近代社会の特徴的な姿が浮き彫りになるはずで

- 1) ニコルからボワギルベールへ
- 2) マンデヴィルの逆説—私悪は公益
- 3) 欲求の社会

紙資料の保存

増田勝彦

(昭和女子大学大学院大学院生活機構研究科教授)

目次

- 1.紙自身に内在する劣化要因
- 2.環境に依存する劣化要因
- 3.劣化予防対策の考え方と実施

1.紙自身に内在する劣化要因

1-1.碎木パルプ紙

リグニンの変色物質の転移

(本紙だけではなく周囲が茶褐色になる)

<対策>→包装用紙製品は中性紙とする(袋、包装紙、箱の紙、板紙)

1-2.酸性サイジング処理紙 *補足-2を参照

1-2-1.酸性物質(明礬(カ明礬)、硫酸アルミニウムなど)

①セルロースを加水分解し、結晶化を促す

②紙への添加物として

②-1 明礬

: 中国の表具師は糊に明礬を入れる(明時代の書籍の劣化)

*芥子園画伝(1701): 絹の場合 膠 1.5%、明礬 0.6%

: 日本画家は、膠に明礬を混ぜてドーサとし、絹、紙に塗布する

*狩野派の法: 紙の場合 膠 2.1%、明礬 1%

*本間良助「日本画を描く人のための秘伝集」昭和8年5月、厚生閣書店

: 西洋の15-16世紀の紙でも明礬は膠と共に使われていた

*マイエンヌの手記(1631):

紙に水3ガロン、膠1ポンド、明礬2.5ポンド(水に対して膠3.3%、明礬8.3%)

*森田恒之「画材の博物誌」昭和61年6月、中央公論美術出版

②-2 硫酸アルミニウム

: 木材パルプ紙のしみ止め用ロジンの繊維への定着剤として添加される

<対策>→酸性度の測定

湿式 中性紙チェックン、pHメータ

乾式 小谷尚子「非破壊方法による書籍資料の酸性度乾式測定方法の検討」

第28回文化財保存修復学会大会、2006

→アルカリ性物質による中和と緩衝性物質の残留処置

炭酸カルシウム(CaCO₃)、重炭酸マグネシウム(MgHCO₃)

*「防ぐ技術・治す技術—紙資料保存マニュアル—」日本図書館協会、2005、より抜粋編集)

但し、明礬添加濃度が低い場合は、劣化速度は遅い。

→「和紙の劣化に対する明礬の影響」古文化財の科学32,pp78-75

→「白色顔料による紙の劣化抑制」古文化財の科学32,pp70-77

DAE法によるトリエタノールアミンの残留処置

日本ファイリングによる事業化

1-2-2.触媒（金属イオン）

①酸化反応を促進する（インクに含まれる鉄、付着した錆、顔料の緑青）

<対策>フィチン酸塩処理の効果が認められる

②黄土に含まれる鉄は損傷を与えない

<対策>→酸性を緩和する処置

1-3.保存・修復材料

①セロテープ類による汚損・変形

<対策>→有機溶剤による除去

②漂白剤（漂白中、残留漂白剤による）

<対策>→外観の向上を図るだけの漂白を避ける

→見難い文字を見易くさせるときのみ行なう

→修復家と討議

版面などでは光漂白(日光、蛍光灯)を処置することがある。

2.環境に依存する劣化要因

2-1.生物環境

虫害とカビ害（温度、湿度が高いと発生しやすい）が主だが、小動物による被害も可能性有り。

<対策>燻蒸、I P M *補足-1を参照

2-1-1.虫害

2-1-2.黴害

（黴の生育範囲）

①褐色斑点(フォクシング)→乾性の黴

②黒色・赤色・青色の黴→湿性の黴

<対策>→保存環境の制御、集中豪雨・配管事故による漏水

→普通の条件では、風通しを確保すれば過度の湿度は避けられる

→防水性の箱の中に一度水気が入ると乾燥し難くなる傾向がある

2-2.生物以外の環境

2-2-1.温度と湿度

①温度と湿度が高いと、化学反応速度が増す

②含水率が低いと紙は硬くなり、折曲げに弱くなる（過乾燥）

③温度湿度の変化による紙の伸縮—含水率が環境相対湿度により変化

④温度湿度の変化が急激な場合の本などの変形

<対策>→書庫・収蔵庫の温度湿度管理

設計による省エネ型収蔵庫、

温度湿度調節機器の設置、特に除湿器の設置

→木や紙、土壁や漆喰壁も湿度調整機能を持つ

→相対湿度と絶対湿度を理解する。調湿剤の含水量。

環境の温度と湿度の条件が悪いと、図書の変形や劣化の促進の他に、カビの発生、虫の侵入を招く。カビ発生などの問題点を把握するためにも、測定と記録が同時に出来る計測器を複数箇書庫に設置して年間の記録をすることが勧められる。

夏季に高温となる最上階や西日が直接当たる書庫などは、専門業者による断熱工事が必要である。

湿度については、絶対湿度（単位体積あたりの空気中の水蒸気量 g/m^3 ）と相対湿度（温度によって大きく変化する空気の飽和水蒸気量と絶対湿度との比%）を理解する事は、現場の状況判断に有効である。

通常、湿度と表記されるときは相対湿度を表している。

$$\text{絶対湿度 (AH) } g/? = \frac{\text{水分量 (g)}}{\text{体積 (?)}} \quad \text{相対湿度 (RH)\%} = \frac{\text{絶対湿度 (g/?)}}{\text{飽和水蒸気量 (g/?)}}$$

* 「図書館・文書館における環境管理」シリーズ本を残す8, 稲葉政満、日本図書館協会

* 温度湿度の監視 商品名：おんどとり(温度、湿度測定とデータ保存)

2-2-2.汚染空気

a)環境大気中の酸素・酸化硫黄・酸化窒素・水分等外部からの物質による化学的作用

汚染大気から→ 亜硫酸ガス (SO₂) 硫酸になる可能性
窒素酸化物 (NO_x) 硝酸になる可能性
オゾン、酸素など

<対策>→アルカリ性物質による中和と緩衝性物質の残留処置 * 補足-2 を参照

炭酸カルシウム(CaCO₃), 重炭酸マグネシウム(MgHCO₃)

DAE 法によるトリエタノールアミンの残留処置

→アルカリ性物質を含む紙で包む

<対策>→収納箱によるシェルター カイルラッパー他

→「容器に入れる—紙資料のための保存技術」、図書館協会

→中性紙によるガス吸着

「挿入法による中性紙の見直し」

[第15回資料保存協議会セミナー講演記録]平成14年10月

アルカリ性紙と長期間密着接触すると酸性紙の変色が大きくなる可能性。

* Masamitsu Inaba et al, 'Insertion-Accelerated Aging Test of Paper for Conservation: Increase in Discolouration of Acid and Alkaline Paper Interface' IIC, Baltimore 2002, pp104-107

b)環境材料から放出される物質による

b-1.新しい木材から放出される樹脂→桧などの箱に保存された金属の表面に樹脂が付着し、錆を進行。紙にも、フォクシング状褐色斑点をつくる。

<対策>→内装木材の場合、ハترون紙、調湿紙などの被覆でも樹脂吸着に効果
樹脂の少ない材を使用する（桐、杉の白太など）

b-2.アルカリ性物質

①染料を変色させる→浮世絵

②写真の乳剤に影響

③絹を劣化させる

④アマニ油（油絵の溶き油）硬化膜を褐色化。

打ち立てコンクリートから放出されるアルカリ性物質など

<対策>→コンクリートの枯らしに時間掛ける、除湿機の連続運転、包装用紙で壁面を覆

う

アルカリ性が極めて高い紙（残留木灰を多く含む和紙）に包む危険性

<対策>→中性の紙に包む

中性紙について

硫酸アルミニウム含有中性紙

* 中野修「中性紙の評価法とこれからの課題」資料保存協議会第1回セミナー(2000)

2-2-3.紫外線その他の光

a)光（一般的には、照明が明るいと温度も上がる。）

①可視光線、紫外線 日に曝された紙が変色する（白くなる、茶褐色になる）

<対策>→紫外線除去フィルターの使用

→光量の制限 暗ければ長時間、明るければ短時間

$50\text{Lux} \times 8\text{hrs} \times 200\text{日} = 100\text{Lux} \times 8\text{hrs} \times 100\text{日} = 80,000\text{Lux}/\text{年}$

（ギャリー・トムソン著、「博物館の環境管理」に記されている例）

博物館・美術館における展示照明の推奨照度（村上隆「文化財のための保存科学入門」）

資料	ICOM (1977) 推奨値	IESNA (1987) 推奨値	照明学会 (1999) 推奨値
光に非常に敏感な資料 (1)	50lxできれば低い方がよい (色温度約2,900K)	50lx	50lx (1日8時間、年300日で積算照度120,000lx/h)
光に比較的敏感な資料 (2)	150~180lx (色温度約4,000K)	75lx (1日8時間、年300日で積算照度180,000lx/h)	150lx (1日8時間、年300日で積算照度360,000lx/h)
光に敏感ではない資料 (3)	特に制限なし ただし300lxを超えた照明を行う必要はほとんどない (色温度約4,000~6,500K)	特に制限なし 実際には展示照明効果と輻射熱を考慮する必要あり	500lx

ICOM:国際博物館会議 IESNA:北米照明学会

(1) 染織品・衣装・死ストリー・水彩画・日本画・素描・手写本・切手・印刷物・壁紙・染色した皮革製品・自然史関係標本

(2) 油彩画・テンペラ画・フレスコ画・皮革製品・骨角・象牙・木製品・漆器

(3) 金属・ガラス・陶磁器・宝石・エナメル・ステンドグラス

lx:ルクス、照度 K:ケルビン、色温度

2-2-4.用途に応じた加工・使用による汚染、変質、疲労破壊

①書の縦位置保管、取扱による表面の擦れ・ページの破れ

<対策>→現状では、収納箱、帙、ラッパーで保管

注意深く丁寧な取扱

②閲覧による紙の疲労

<対策>→調査・研究時だけの保護策

2-2-5.災害

①水害（水害を受ける可能性は予想以上に高い）

*火災時の消化水、

*台風・集中豪雨時に浸水だけでなく壁・天井からの水漏れ

*配管の故障による水漏れは意外な場所が被害を受ける

<対策>→水を被った文書は、まずポリ袋に入れて出来るだけ小分けにし、

急速に凍結乾燥させる（凍結乾燥装置）

一度に処理できる量をあらかじめ調べておく
→急速凍結のほうがよいが、なければ家庭用冷凍庫でもよい。
その時には、利用できる冷凍庫の存在を確認しておく。家庭用冷凍庫を使用する時は解凍後吸い取り紙で徐々に乾燥させる

2-3.収蔵用材

2-3-1.碎木パルプ紙に含まれるリグニンの変色と変色物質の転移

(本紙だけではなく周囲が茶褐色になる)

<対策>→包装用紙製品は中性紙とする(袋、包装紙、箱の紙、板紙)

2-3-2.新しい木材から放出される樹脂→桧などの箱に保存された金属の表面に樹脂が付着し、錆を進行。紙にも、フォクシング状褐色斑点をつくる。

<対策>→内装木材の場合は、ハトロン紙などの被覆でも樹脂吸着に効果

樹脂の少ない材を使用する(桐、杉の白太など)

→中性紙によるガス吸着

*「挿入法による中性紙の見直し」[第15回資料保存協議会セミナー講演記録]平成14年10月

2-3-3.アルカリ性が極めて高い紙(残留木灰を多く含む和紙)に包む危険性

<対策>→中性の紙に包む

3-保存修復処置

a. 裏打ちと補修

文書の補強には、裏面に和紙を貼り付ける裏打ちが一般的。和紙の持つ薄さ、強さ、柔軟さに加えて極めて安定性が高いことにより、裏打ち用資材として和紙が内外で利用されている。接着剤としては、デンプン糊に加えてCMCやMCが使われる。

*修復機材や材料・道具、株式会社パレット <http://www.paret.jp/>

b. 漉嵌め法

虫食穴を機械的に補修する技術としての、漉嵌め(LieafCasting)技術によると、紙資料は大量の水を浴びるので、風合いを維持することが難しい。また、漉嵌めされた部分の紙は出来たての新しい紙なので、時代を経た周囲の紙とは自ずと異なる。しかしながら、漉嵌め技術は近世文書の様に数千点、数万点の資料群を相手にするときに非常に有効な技術です。技術は旧ソ連で開発され、ヨーロッパ各国に広まったので、ヨーロッパの紙のように短繊維で出来た紙に適した機械だが、日本の紙に適合するように設計された漉嵌め器と繊維の調製を行って、国指定文化財の紙資料修復にも活躍している。

c. ペーパーズプリット

本紙を表裏2枚に相剥ぎして、補強用紙を中層として貼り合わせる補強方法。

脆弱化した新聞紙その他、両面に文字等が有る文書に適用されている。ドイツで開発された。

本紙表面を保持するための紙を両面からゼラチンで貼り付けて相剥ぎし、中間に薄い和紙など補強のための紙を合成接着剤で貼り付け、乾燥後に温湯と酵素でゼラチンを除去する。

*「紙と本の保存科学」園田直子編、岩田書院、2009.10

d. 微小点接着法(Micro-dot adhering)

多数の微小点で紙を接着する方法で、全面に接着剤塗布をしない事による以下の利点がある。

- 1、乾式に近い接着
- 2、水性接着剤を水に敏感な材料に使用することが可能
- 3、乾燥時間が極めて短時間

- 4、極めて少ない伸張・収縮
- 5、リバーシブルに近い
- 6、接着された紙の柔軟性

以上の利点により、文書館スタッフなどが、小さな裂け、虫食箇所の小繕いに利用できると考えられる。

*「わら半紙資料等への微量点接着法による反らない裏打ち」福島希、株式会社資料保存器材 2006/06/13

<http://www.hozon.co.jp/report/fukushima/fuku-no001-bishouten.html>

4.劣化予防対策の考え方と実施

「繊維の寿命」「紙の寿命」と「紙を素材とした文化財(書籍など)の寿命」
修復の考え方

損傷を受けた原因は除去できるか。

本来の姿、装丁を尊重しているか。

乱暴な取扱にも耐える強さまで修復する必要はあるか。

*図書館・文書館における環境管理（シリーズ本を残す8）稲葉政満著 2001.5

*IFLA 図書館資料の予防的保存対策の原則（シリーズ本を残す9）エドワード・P.アドコック
編、国立国会図書館訳 日本図書館協会資料保存委員会編集企画 2003.7

*「容器に入れる一紙資料のための保存技術」シリーズ本を残す3，相沢元子他、日本図書館協会